

J.S.バッハ：チェンバロ協奏曲 二短調 BWV 1052

バロック時代の合奏音楽のなかで、チェンバロは「通奏低音」楽器として欠かせないものだった。通奏低音はバロック音楽の響きを下から支える低音のことで、チェロやコントラバス、ファゴットなどの低音楽器が担当したが、チェンバロは通奏低音に即興的に和音を付けながら合奏全体を支えた。

J.S.バッハ（1685-1750）の合奏曲も、もちろん例外ではない。だが、独奏楽器としてのチェンバロの魅力を知り尽くしていたバッハは発想を大きく転換し、合奏のなかでこの楽器を主役に立てようとした。それがチェンバロ協奏曲である。それ以前にも《ブランデンブルク協奏曲第5番》でチェンバロをヴァイオリン、フルートとともに独奏楽器の座に押し上げていたが、それをさらに押し進めたものといえる。

一連のチェンバロ協奏曲が生まれたのは、バッハが1723年から晩年までを過ごしたライプツィヒ時代である。ライプツィヒでトーマス・カントルという地位にあったバッハは、聖トーマス教会ほか市内4教会の音楽監督のほか、教会付属学校の教師もつとめるなど多忙をきわめていた。それにもかかわらず、バッハはライプツィヒ大学の学生たちを中心とした合奏団、コレギウム・ムジクムでの指揮活動を大事にしていた。音楽愛好家が経営するコーヒー店や庭園などで行われたコンサートの重要なレパートリーとなったのが、チェンバロ協奏曲だった。独奏チェンバロが1台のものから4台のものまで種々の協奏曲が生み出され、バッハが弾き振りをした。その多くは旧作からの編曲であり、本日の《チェンバロ協奏曲二短調》も失われたヴァイオリン協奏曲の編曲であることが判明している。とはいえ、編曲の達人だったバッハのこと、曲はチェンバロの奏法や技巧に完全にフィットした一つの「作品」に生まれ変わっている。19世紀にバッハ復興のきっかけを作ったメンデルスゾーンやシューマンも絶賛した名曲である。

チェンバロは本来の通奏低音の役割も兼ねながら、主役をつとめる独奏楽器として、幾何学模様のように入り組んだ旋律や、分散和音、急速に駆け抜けるパッセージなどを次々にこなさねばならず、奏者には高度な能力が要求される。

第1楽章：アレグロ、二短調。全楽器がユニゾン（同音）で奏でる決然とした主題に導かれて、チェンバロのソロ旋律が勢いよく飛び出す。冒頭の問題を柱としながら、チェンバロが技巧的な見せ場を作り上げていく。

第2楽章：アダージョ、ト短調。やはりユニゾンの主題に導かれて、チェンバロが憂いにみちたソロ旋律を奏で始める。

第3楽章：アレグロ、二短調。第1楽章に匹敵する構成をもち、下降する音型ではじまる活発な主題を柱に、チェンバロの技巧がフルに発揮される。

遠山菜穂美

楽器編成：チェンバロ独奏、弦5部

※スコア上の表記

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。